

松の枝葉にもたとえられるご子息もまた、十八歳にして公卿の一員におなり遊ばし、行く末が期待される。

（金吾納言頼通様は御年十八歳。私匡衡は昔侍読として君に学問をお教えした。そこで此の句を献ずるのである。）

## 【校異】

- 1, 閣―閣(島)(多) 2, 日―月(神) 3, 取―為(国)(東北)(賀)  
 (多) 4, 閣―閣(内)(静)(東A)(東B)(島)(多) 5, 十八―  
 ト(東北)

## 【押韻】(◎は韻字)

××××○○○× ×○○××○○◎ (上平声東韻)  
 ×○○×○○× ×○○×○○×◎ (上平声東韻)

## 【語釈】

◎夏日||寛弘六年五月一九日。『権記』「寛弘六年五月十九日、癸酉、詣左府、有作文」

◎左相府||藤原道長

◎松風小暑寒||句題の基となつた詩句は未詳。

◎松風||「池冷水無三伏夏 松高風有一声秋」《和漢朗詠集》卷上 納涼

源英明

◎小暑||二十四節季の一。夏至から数えて十五日目。

◎暑氣||夏の暑さ。「西日韶光尽 南風暑氣微」《白氏文集》九三五「春

末夏初閑遊江郭二首 其二」

◎台閣||尚書省。太政官。「尚書亦天下之望也、庸才不可以攀台閣之月」《本朝文粹》卷六「申民部大輔狀」橘直幹

◎風標||様子。風采。「惟公少而英明 長而弘潤。風標秀舉、清暉映世」《文選》卷五十九「齊故安陸昭王碑文」

◎枝葉||枝と葉。子孫。

◎十八公||松のこと。松の字を分解すると十八公となる。「張勃吳錄曰、

丁固夢松樹生其腹上。人謂曰、松字十八公也。後十八年、其為公平」

《芸文類聚》木部上 松

◎金吾納言春秋十八||金吾は衛門の唐名。この年(寛弘六年)の春三月四日、道長息頼通、権中納言及び左衛門督に補せられる(年一八)。《公卿補任》

卿補任》

◎匡衡昔卷勸学||「撰関侍読 宇治殿(如正 江匡衡丹波守以下略)」

《二中歴》第二

## 【通釈】

夏の日、左大臣殿の東閣に侍って、皆で「松風の下では小暑の日も寒く感じられる」という題で詩を作る「題の中から韻字を取る」

夏の暑さはわずかに感じられるばかりで、着衣はいつそう冷やかだ。

それは松の木の下に清らかな風が吹いているからなのである。

この東閣の持ち主でいらつしやる左大臣殿一人のご様子が秀でているだけではない。

◎竈歌＝竈戚の歌。『蒙求』「竈戚扣角」の故事をふまえる。斉の桓公は竈

戚が牛の角を叩いて歌うのを聴いたが、その内容は政事の厳しさを諷するものであった。桓公は竈戚を志有る者と知り、召しだして相とし

た。『三齊畧記』云、竈戚候斉桓公出而扣牛角歌曰、南山粲粲 白石爛、

生不逢堯与舜禪、短布单衣纔至骭、從昏飯半（牛）至夜半、長夜漫何

時旦。桓公之因為相」〔書陵部藏『蒙求』「竈戚扣角」〕「竈戚之謳歌兮

斉桓聞以該輔」〔『楚辭』「離騷」屈源〕

◎本自＝もとより。

◎容暇＝暇を容れる。

◎蹉跎＝つまづくこと。年老いて衰えるさま。「齒髮蹉跎將五十 関河迢

遶過三千」〔『白氏文集』一一〇七〕「十年三月三十日別微之於澧上。十

四年三月十一日夜遇微之於峽中。停舟夷陵三宿而別。言不尽者以詩終

之。因賦七言十七韻以贈。且欲寄所遇之地与相見之時。為他年会話張

本也」〔片心休慘戚 双鬢已蹉跎〕〔『白氏文集』三三三四〕「和東川楊

慕巢尚書府中独坐感戚在懷見寄十四韻」

## 【通釈】

月は輝き露は降り夜は長い〔閑字を以て韻とする〕

月は輝き露は降り夜は長く思いはめぐる。

この時手すりにもたれば自然と顔がほころぶ。

北斗が北の空を次第にめぐって行くにつれ、鏡のような月はいつそう輝きを増し

東の空が白んでくるにはまだ間がある内に、珠のような露は辺り一面に降りる。

宮中の漏刻は時を告げるが、朝を知らせる鶏の鳴き声は遅く、笛の音が恨めしげに響く。

秋風が吹き、鶴が戒めの声を上げ、誰かの歌声が聞こえるが、この治まつた御代の歌は、古の竈戚のごとく政の厳しさを歌うものではない。

だがしかし、昔から秋をゆつくりと惜しんでいる暇など無いものなのだ（秋はあつという間に過ぎて一年も終わってしまう。）

気がつけば私も年老いて両の鬢はすっかり白髪混じりだ。

九 夏日陪左相府東閣同賦松風小暑寒応教〔題中取韻〕

暑氣尚微衣更冷

暑氣尚微かにして衣更に冷やかなり

応因松下有清風

まさに松下に清風有るに因るべし

豈唯台閣風標秀

豈に唯台閣の風標秀でたるのみならむや

枝葉又期十八公

枝葉も又十八公たるを期す

〔金吾納言春秋十八。匡衡昔執卷勸学。故献此句。〕

〔金吾納言春秋十八。匡衡昔卷を執り学を勧む。故に此の句を献ず。〕

商飆鶴警め甯歌閑なり

秋を惜しむに本より暇を容るること無し

覺えず蹉跎として両鬢斑なり

1, 商—高(祐)  
2, 顔—韻(鶴)  
3, 間—聞(賀)(山)(東北)

4, 本一<sub>来</sub>(京)(祐)  
5, 暇一<sub>假</sub>(内)(国)(島)(多)

6, 斑一班(国)(京)(静)(東北)(多)(鶴)

× × × ○ × × ⊙ (上平声刪韻)

× ○ ○ × × ○ ⊙ (上平声刪韻)

× 0 × × × × ×  
 ○ × ○ ○ ○ × ◎ (上平声山韻) 同用

○ × ○ ○ ○ × ×      ○ ○ × × × ○ ◎ (上平声山韻) 同用

×○××○○×  
 ○×○○○××◎ (上平声刪韻)

◎月露夜方長Ⅱ句題の基となつた詩句は未詳。参考「九月西風興 月冷霜

華凝 思君秋夜長 一夜魂九升」《白氏文集》五八九「長相思」 「雲露青

天月漏光 中庭立久却歸房 水窓席冷未能臥 挑盡殘燈秋夜長」〔同一二〕

九五「秋房夜」

◎往還Ⅱ行ったり、来たりすること。往来。「時輩推遷年事到 往還多是

白頭人」『白氏文集』三三九六「四年春」

◎檻＝手すり、欄干。「独憑朱檻立凌晨 山色初明水色新」〔『白氏文集』〕

九一「庾楼眺望」

◎開顏Ⅱ笑う。につこりする。「迎客笑開顏 興発宵遊寺」〔『白氏文集』〕

三一六一「喜閑」

◎北斗〓北斗七星。「天柱揭東溟 文星照北斗」《全唐詩》卷三五五「和

和依本韻 劉禹錫

◎宮漏Ⅱ宮中の水時計。「五声宮漏初明後一点窓燈欲滅時」(『白氏文集』)

七二三「禁中夜作書与元九」《千載佳句》上 曉、『和漢朗詠集』卷

下  
曉所収

◎鶏遅 鶏が鳴くのは夜が明けたしるし。すなわち、鶏が遅いのは夜明け

が遅いことをいう。「梁上鶏遅知未曉」(『管家文草』卷二「秋夜宿弘

文院」

◎羌笛 北方のえびすの吹く笛。「近世双笛從羌起。羌人伐竹未及已。龍

鳴水中不見已。截竹吹之聲相似」《文選》卷十八「長笛賦」馬融

「羌笛何用怨楊柳 春光不度玉門關」《全唐詩》卷二五三「涼州詞」

王之渙

◎商飈ニ秋風。「故今商飈半暮之秋漢月正圓之夕」《本朝文粹》卷八「八

月十五夜賦月影滿秋池応太上法皇製詩序」菅原淳茂

見渡せば皆賢く才能にあふれた者ばかりである。人々はお召しに即座に従い、文官も武官も皆用いられるのを待つのである。

見れば、月は清らかに露は白々と輝いており、大気は爽やかで夜は更けていく。もの寂しい秋の物思いを催し、深い蒼色の天を望めば、幾列かの渡り鳥が月光に照らされてその影を湖に映している。鶴は秋の露を警めて鳴くが、その声は中空の雲に遮られてしまう。都を離れた辺土にあつて故郷を恋い、独り寂しく往事を思い出すに至つては、(都の月を) 関山が隔てる程遠ざかつて道はまだめぐり、辺土の月は王明君の夢を驚かす。(秋も深まり) 蕙蘭はまばらになつたがその上に置く露は乾かないまま、故郷を追われた楚の屈原の涙に添えられるのである。

まさに今、この宴席に陪す官人たちが皆語り合うには、漢の公孫弘は東閣を開放して広く人材を集めたが、残念ながら代々続く大臣の家柄ではなかつた(しかし藤権大納言殿は大臣家の方である)。晋の謝安石は西池で宴を催したが、それはただ美しい妓女たちを従えただけであつた(しかし藤権大納言殿は有能な官人たちを従えていらつしやるのである)。今が古を凌駕すること、いったい誰が非難しようか、と。

さて私匡衡は霜台(彈正台)という冷官ではございますが、かろうじてこの身を留め、朝廷にお仕えしております。そうして年老いた親を抱え、暁の風に樹が揺れるにつけても、微禄ゆえに老母の恩に報いることができない身を嘆くのでございます。今日のこの詩宴に連なり茫然自失しておりますが、どうぞ格別の恩愛を賜りますようお願い申し上げます次第でございます。

ます。

秋の天はもの寂しく、見るものの心をひたすら悲しませる。

月は冴え冴えと輝き、露はしとどに降り、夜はすっかり更けた。

辺境の砦では胡人の吹くあしぶえの音が愁いを帯びて響き、月光が隅々まで照らす。

蘆の生い茂つた洲では停泊中の舟に降りた露が涙と相半ばして旅人の襟をぬらす。

砧を照らす月光は白々として練りぎぬのようだが、布ではないので風が空しく打つばかり。

草むらに降りた露はきらきらと珠のようだが、(拾い集めようという人もなく) 鶴だけが探し求めて警しめの声を上げる。

(この清らかな月光と露に) 対して独りいまだ俗世を捨てられないことを恥じている。

官を辞し世を捨てて、山中の桂の生える巖に住みたいと思う。

#### 八月 月露夜方長〔以閑為韻〕

月露夜長意往還 月露夜長くして意往還す

此時憑檻自開顔 此の時檻に憑れば自ら顔を開く

鏡壁北斗漸廻後 鏡は壁く北斗漸く廻りての後

珠点東方難曙間 珠は点ず東方曙け難きの間

◎練＝ねりぎぬ。ここでは月の光の白さを白いねりぎぬに見立てる。「梁沈約八詠、望秋月日、秋月明如練 照曜三爵台」《芸文類聚》天部上月》

◎砧＝きぬた。絹布を柔らかくし、つやを出すために杵でたたく為の台。

漢詩では遠く離れた夫の冬衣を準備する妻が、夫を思いつつ砧を打つ、というモチーフが一つの類型となっている。「欄高砧響発 楹長杵声哀」《文選》卷三〇「擣衣」謝惠連「誰家思婦秋擣帛 月苦風淒砧杵悲」《白氏文集》一二八七「聞夜砧」

◎鶴独尋＝鶴は秋草の上に露が降りると戒めのために鳴く。「一警」の語釈参照。

◎身未去＝身去は世を捨てて隠棲すること。したがって身未去は未だ隠棲していないことをいう。

◎桂巖＝桂の木の生えている巖。桂洞に同じ。世を逃れ隠棲すべき所。意味としては巖だけで十分だが、詩題の「月露」の縁で「桂」の語を冠した。「巖穴無結構 丘中有鳴琴」《文選》卷二二「招隱詩二首」其一 左思「いかならん巖の中に住まばかは世の憂きことの聞こえこざらむ」《古今和歌集》雑歌上 九五二 題しらず よみ人しらず

「隣対楓巖霜葉縛 窓当桂洞月華晴」《本朝無題詩》卷七「秋日山家眺望」中原広俊

◎雲底＝雲の重なった底。山中をいう。

◎抽簪＝簪をぬく。官を辞すること。簪は仕官の象徴である冠を髪に留める

ためのものであるからいう。「萬一差池似前事 又応追不抽簪」《白氏文集》二七一五「戊申歲暮詠懷三首」其三「魏闕抽簪 戴曉霜而遙送老」《本朝文粹》卷四「為貞信公辭闕白第三表」大江朝綱

#### 【参考】

『類從句題抄（類題古詩）』七十一意部に本詩の頷聯・頸聯を載せる。

#### 【通釈】

七言。秋の夜、右近衛大将権大納言殿のお屋敷で庚申を守り、皆で「秋の思ひは月光と夜露のもとで深まる」という題で作る詩一首（并に序）

右親衛藤原相殿は礼儀と徳行とをもつて政治を補佐なさる。

媚びへつらう者を避け、賢者を推挙することによって天子を堯・舜のごとき聖帝とし、財物を軽んじ、立派な人物を重んじることによって彼の伊尹や周辺のごとく天子を補佐なさり、また、花咲く朝、雪の夜には酒宴を命じて詩心を喚起なさる。清らかで奥深い談論をなさつては古の聖人の道を味わい、それによつて時宜にかなつた政を行なわれる。

この時、秋にもう一月閏月が加わり、今宵は庚申に当たる。殿は季節の景物を惜しんでその思ひを晴らそうと、人々にお側にお仕えすることを課してそれぞれ詩をもつて志を述べさせる。期せずして一堂に会す。左右を

◎問然「口をはさんで非難を加えること。」「禹吾無間然矣」《『論語』泰伯》

「今日之事誰敢問然焉」《『平安朝佚名詩序集拔萃』「夏日遊寬壽寺」

源英明》

◎霜台「彈正台の唐名。五「八月十五夜陪員外藤納言書閣同賦月照牖前竹」

の「霜台」注参照。

◎薄命「拙い運命。」「我病臥渭北 君老謫巴東 相悲一長歎 薄命与君同」

《『白氏文集』二四二「聞庾七左降因詠所懷」

◎愁「ナマシヒ」《觀智院本『類聚名義抄』

◎風樹「風に吹かれる樹。親に孝養を尽くしたくともそれができない事の

たとえ。風樹悲。」「樹欲静而風不止 子欲養而親不待也」《『韓詩外伝』

九「欲報親不待 孝心無所施」略「庶使孝子心 皆無風樹悲」《『白

氏文集』八九「贈友詩五首」其五》

◎未報母「匡衡の母が誰であるかは不明だが、正暦四年の奏状「申弁官左

右衛門権佐大学頭等状」において「母已八旬、悲祿養之猶遲」と述べ

ているので、八十歳を越える長寿を保っていたらしい。正暦四年には

匡衡は四十二歳であるので、匡衡誕生の時母は四十歳に近く、比較的

高齢での子ということになる。また、彼は、しばしば詩文の中で老齡

の母に対する氣遣いを述べる。「常欲掛冠緣母滯」《二十九「七言冬日

登天台即事」員外藤納言教」「母老少余年」《七十一「觀右親衛藤原相

述懷詩不改本韻依次奉和」「江翁母老作會參」《九十「仲春積奠聽講

古文孝經》

◎恍忽「ぼんやりして自失する様子。」「驚起空歎息 恍忽飛神魂」《『玉台

新詠』「雜詩九首 其五夢還詩」鮑照》

◎恩私「私的な恩愛。特別な恩愛。」「葉龜今夕罷 詔書明日追 追我復追

君 次第承恩私」《『白氏文集』二二〇「同微之贈別郭虛舟鍊師五十

韻》

◎蕭瑟「ものの寂しい様子。」「湖上秋沈寥 湖辺晚蕭瑟」《『白氏文集』三三

三「湖亭晚望殘水」」「悲哉秋之為氣也 蕭瑟兮草木搖落而變衰」《『楚

辭』「九弁」宋玉》

◎鐘漏「時を報じる鐘の音。また、時。」「渚宮東面煙波冷 浴殿西頭鐘漏

深」《『白氏文集』七二四「八月十五日夜禁中獨直對月憶元九」

◎沙塞「北方の砂漠の砦。転じて北のえびすをいう。」「翠黛紅顏錦繡粧

泣尋沙塞出家鄉」《『和漢朗詠集』卷下「王昭君」大江朝綱》

◎茄「蘆笛。胡人が吹く笛。」「泣胡城辭百戰之師 胡茄未歇」《『和漢朗詠

集』卷下「曉」

◎曲「くま。隅々。」「緣何更覓吳山曲 便是吾君座下花」《『和漢朗詠集』

卷上「蓮」

◎蘆洲「蘆の茂った洲。」「夜烏喧粉堞 宿雁下蘆洲」略「転蓬驚別渚

徙橘愴離憂 魂飛灞陵岸 淚尽洞庭流」《『全唐詩』卷七九「晚泊江鎮」

駱賓王」《『郭門隱楓岸 候吏趨蘆洲』《『全唐詩』卷一二六「送康大守」

王維》船旅の憂いとともに詠まれることが多い。

◎礙「さまたげる。」

数多くの漢詩、和歌に詠じられているほか、『千載佳句』、『和漢朗詠集』、『新撰朗詠集』の部立にもなっている。↓田中幹子「漢詩・朗詠の伝承と王昭君説話―「みるからに鏡の影のつらきかな」歌の背景と変遷」(『講座日本の伝承文学2』平成七年三弥井書店)岡崎真紀子「平安朝における王昭君説話の展開」(『成城国文学』第九号)

◎蕙蘭Ⅱ蕙も蘭も秋の香草。「秋蕙蘭以為佩」(『楚辞』「離騷」屈原)

◎珮Ⅱ佩と同じ。腰に帯びるもの。

◎屈原Ⅱ屈原は、名は平。楚の王族。高潔な人柄であつたが讒言により楚を追放され、汨羅に身を投げて死んだ。屈原については『蒙求』「屈原沢畔」の故事などによって平安朝の人々にも親しまれており、『源氏物語』「須磨」巻の源氏の歌「から国に名を残しけるひとよりもゆくへ知られぬ家るをやせむ」も屈原の故事を詠んだ歌として知られる。

「史記、屈原、名平、与楚同姓。襄王甚任之、同列大夫上官。斬尚妬其能、因讒之、王遂放之。原至江滨、被髮行吟沢畔、形容枯槁。漁父問曰、子非三閭大夫耶、何故至此。原曰、举世皆濁、我独清、衆人皆醉、我独醒。所以見放。漁父曰、举世皆濁、何不随其流揚其波。衆人皆醉、何不餽其糟啜其醢。原曰、新沐者彈冠、新浴者振衣。誰能以身察察、受物之汙汝乎。寧赴湘流、葬於江魚之腹。漁父鼓枻而去。原乃懷石自投汨羅江而死」(『尊經閣文庫藏応安頃五山版『蒙求』三〇九「屈原沢畔」)

◎屈原乃淚Ⅱ「攬茹惠以掩涕兮 霑余襟之浪浪」(『楚辞』「離騷」屈原)

ここの一句、「離騷」の措辞による表現である。

◎朝士Ⅱ朝廷の官人。「爰朝士大夫之思入風雲 志在花鳥者」(『本朝文粹』卷十一「初冬泛大井河詠紅葉蘆花和歌序」源道濟)

◎大夫Ⅱ五位の官人。

◎僉Ⅱみな、全員。

◎公孫弘之開東閣Ⅱいわゆる、「蒙求」「漢相東閣」の故事。前漢の公孫弘は丞相となつた後、広く人材を集めるため東向き的小門(東閣)を開いて賢人を招いた。五「八月十五夜陪員外藤納言書閣同賦月照牖前竹応教」の「公孫弘曰」の注参照。

◎謝安石之譙西池Ⅱ謝安は晋の人。安石は字。高潔を以て知られ、若い頃は朝廷に召し出されても出仕せず、臨安の山中に遊んだ。しかし、山水を遊樂するときには常に妓女を伴った。ただし、西池で宴を開いたことについては未詳。「東閣」と対句にするため「西池」の語を用いたか。『蒙求』「謝安高潔」の故事で知られる。「謝安、字安石、陳国陽夏人。一中略一初辟除、並以疾辞。有司奏、安被召歷年不至、禁錮終身。遂棲遲東土、常往臨安山中、放情丘壑。然每遊賞必以妓女從。一後略一」(『晋書』七十九)徐注本『蒙求』は「謝安高潔」の注に上記『晋書』を引くが、宮内庁書陵部本には妓女を從えて遊んだことは見えない。「晋書、謝安、字安石、家在会稽上虞県。優遊山林六七年間、徵召不出。雖彈琴奏相属。繼以禁固。安然不屑也」(宮内庁書陵部本『蒙求』七「謝安高潔」)



◎秋情＝秋の思い。「秋情念念無他計」《菅家文章》卷五「秋日陪源重相第錢安鎮西・藤陸州各分一字」

◎索索＝心が不安で落ち着かない様子。また、木の葉などが風に鳴る音。

「上六 震索索 視矍矍」《易經》「震」《山蒼蒼以墜葉 樹索索而

揺技》《貞女峽賦》江総「秋風索索 子野之商絃讓音」《本朝文粹》

卷三「対松竹」藤原広業「ただし、本詩では「蕭索」に同じくもの寂

しいの意か。「于時 爽籟増声 蕭索陪思」《本朝文粹》卷十「九日

後朝侍宴朱雀院同賦秋思入寒松応太上皇製詩序」紀長谷雄

◎蒼蒼＝天の深い青色。「天色但蒼蒼」《白氏文集》二二八「効陶潜体詩

其十六」

◎賓鴻＝渡り鳥。「季秋之月一中略一鴻雁來賓」《礼記》月令「稚羽晚鴻

賓」《菅家文章》卷一「九日侍宴同賦鴻雁來賓」

◎五湖＝太湖の別名という。范蠡が越王を助けて呉を滅ぼした後、五湖に

舟を浮かべて去ったという、所謂「范蠡泛湖」《蒙求》二七四「の故

事で有名。我が国の王朝詩の例ではほとんどがこの故事を踏まえて詠

まれるが、本詩は特に「范蠡泛湖」を踏まえての修辭とは考えられな

い。「風俗通曰、越滅呉。范蠡乗舟五湖」《芸文類聚》水部下 湖「范

蠡収責勾踐 乗扁舟於五湖」《後漢書》陳蕃伝「和漢朗詠集」卷下

述懷部所収「欲浪跡於五湖之春煙」《本朝文粹》卷二「答同公（貞

信公）辞関白表勅」菅原文時「五湖通越范公去」《本朝無題詩》卷

七「著笠戸泊一吟」釈蓮禪

◎仙鶴＝鶴。鶴は仙鳥であるので言う。

◎一警＝鶴は秋になり露が降りると警告の声を挙げると言われる。「風土

記曰。鳴鶴戒露。此鳥性警、至八月白露降、流於草上、滴滴有声。因

即高鳴相警。移徙所宿処。慮有変害也」《芸文類聚》鳥部上 鶴「好

音弥清 猶警涼秋之曉露」《本朝文粹》卷十一「五言仲春积雪聽講毛

詩同賦鶴鳴九臯」藤原雅材

◎半天＝天地の中間。なかぞら「水穿紅葉滴幽洞 山出白雲昇半天」《和

漢兼作集》九四九「仙洞落葉」源師時「唐詩における用例は見出し難

い。歌語「なかぞら」の漢訳か。「あけがたにいでにし月も入りぬら

むなほなかぞらの雲ぞみだるる」《相模集》五二

◎辺涯＝辺土、辺境に同じ。「叙旅心之所辺涯 喻湖水之无涯岸者也」《菅

家文章》卷七「秋湖賦」

◎幽独＝静かに独りでいる。「殊方我漂泊 旧里君幽独」《白氏文集》五

〇九「孟夏思渭村旧居寄舍第」「屋中有琴書 聊以慰幽独」《同三五

一一「春日閑居三首」其一「など白詩にも用例が多い語。

◎王明君＝漢、元帝の妃。王昭君。晋文帝の諱を避けて王明君という。宮

中第一の美女であつたが、画工に賄を贈らなかつたため、醜く描かれ、

ために匈奴に嫁すこととなった。去るに当たつて昭君を召見した元帝

は、その美貌としとやかさを知つて深く悔いたが、匈奴との約束を重

んじた帝は、彼女を胡地に嫁がせざるを得なかつた。王昭君（明君）

の悲劇は格好の文学素材としてさまざまに取り上げられ、我が国でも

納言書齋同賦樹色雨中暗詩序」

◎致君於堯舜Ⅱ君主を中国の聖帝堯・舜のごとく立派な君とする。「伊尹

求致君於堯舜」《『本朝文粹』卷十二「詰眼文」三善清行

◎輕財重士Ⅱ「輕 イヤシウスル」《観智院本『類聚名義抄』「重 タウ

トブ」《観智院本『類聚名義抄』

◎比跡於伊周Ⅱ伊周は殷の伊尹と周の周公旦のこと。二人とも古代中国の良相。右親衛員外丞相は、彼らのごとく天皇を補佐する。

◎露酌Ⅱ露は酒の異名、酒を酌み交わすこと。「露酌数行 仙窟掌中之飲」

《『菅家文章』卷一「九日侍宴同賦天錫難老心製詩序」「花前露酌忘

衰日 月下風情似少年」《『本朝無題詩』卷三「八月十五夜詩」大江匡

房」↓本間洋一「王朝漢詩の飲酒詠管見―その語彙・故事をめぐる覚

書として―」《同志社女子大学日本語日本文学』第四号一九九二年十

月

◎風吟Ⅱ風の音か「塵事渺茫夢覺曉 風吟蕭灑葉零昏」《『本朝無題詩』卷

六「秋日林亭即事」藤原忠通

◎素論Ⅱ清らかで高尚な議論。「求諸素論 長生之驗寔繁 訪於玄談 久

視之方非一」《『本朝文粹』卷三「対神仙」都良香」《嵯中散之竹林幽

則幽矣 嫌殆非素論之士」《『本朝文粹』卷九「暮春藤亜相山庄尚齒会

詩」藤原文時

◎玄談Ⅱ深遠な老荘の道に関する談義。「比玄談不説之 故遇我君之逐虚

舟」《『菅家文章』卷六「九日後朝侍朱雀院同賦閑居染秋水心太上天皇製」

◎時政Ⅱ時に応じて施す政。時令に同じ。「有司勉遵時政、務平刑罰」《後

漢書』明帝紀

◎余閏Ⅱ閏月、本詩序においては閏八月。

◎節物Ⅱ季節の品物、景色。「踟躕感節物 我行永已久」《『文選』卷三十

「擬明月何皎皎」陸機

◎遣懷Ⅱ心を晴らす。「将乖不忍別 欲以遣離情」《『文選』卷二三「出郡伝舍哭范僕射」任昉

◎陪侍Ⅱ貴人のお側に仕えること。「雖近習旧勞之僕妾 不能陪侍」《『本

朝文粹』卷十三「為左大臣供養淨妙寺願文」大江匡衡

◎左顧右顧Ⅱ左右を見渡す。周囲を見る。左顧右眄に同じ。「謂蕭曹不足

儔 衛霍不足侔也 左顧右眄 謂若無人 豈非君子壯思哉」《『文選』

卷四二「与吳季重書」曹植「不堪船路送秋心 左顧右望景氣深」《『本

朝無題詩』卷七「著椒泊愁吟」釈蓮禪

◎賢能Ⅱ賢くて能力のある人。「且士賢能而不用」《『史記』「太史公自序」

「賢能不待次而举 罷不能不待頃而廢」《『荀子』王制篇》「伏願陛下

早改丞相之職 更挾賢能之人」《『本朝文粹』卷五「為清慎公辞右大臣

第三表」大江朝綱

◎如響之応声Ⅱ声に应じてすぐに響きが返るように、すぐに应じること。

「言無可否、応之如響」〔李善注、史記 淳于髡曰、鄒忌、其応我若響

之応声也〕《『文選』卷五三「運命論」李康》「応響而和、甚於宿構焉」

《『本朝文粹』卷八「延喜以後詩序」紀長谷雄

X O O X O O X      O X O O X ⊙    (下平聲侵韻)

- 1、陪一陪（国）（島）

- 2、亞—西（鶴）

- 3、相一將(内)(陽)(靜)(国)(東A)(東B)(島)(京)(山)(神)

- (無) (岡) (東北) (多) (鶴) 一相 (ミセケチシテ「将」ト訂正) (祐)

- 4、相一將(内)(陽)(陽)(静)(国)(東A)(東B)(島)(京)(山)

- (祐)(神)(無)(岡)(東北)(多)(鶴)

- 5、於<sub>1</sub>放(鶴)  
6、周<sub>1</sub>同(島)  
7、閏<sub>1</sub>潤(祐)

- 8、惜—情（神）—借（鶴）  
9、懷—壞（島）

- 10、索索—蚩蚩（国）—营々（島）  
11、五—丘（東A）

- 12、浪―清（鶴）  
13、至夫―至如夫（国）  
14、故―胡（京）

- 15、者一云（島）  
16、曰一云（祐）

- 17、輔―補（底）諸本ニヨツテ改ム

- 18、閣一閣（内）（京）（無）（岡）（鶴）

- 19、態―熊(内A)(山)(東北)(賀)(鶴)―能(祐)  
20、石―否(島)

- 21、愁—愁(祐)  
22、微—徵(内A)  
23、鋪—浦(京)

- 24、擣一棟（京）

【押韻】  
◎は韻字

下平声侵韻

○ ○ ○ × × ○ ⊙

×××○○×◎ (下平声侵韻)

○ × ○ ○ ○ × ×

○○○××○○◎ (下平声侵韻)

○ × ○ ○ × × ○  
× ○ × ○ ○ ×

(下平聲侵韻)

○ × × ○ ○ × ×      × ○ ○ × × ○ ⊙      (下平聲侵韻)

◎秋情月露深Ⅱ句題の基となつた詩句は未詳。参考「秋深露已繁」(『全唐詩』卷一五九「入峽寄弟」孟浩然)

◎右親衛員外外相相藤原濟時時か。寛和元年元年從二位從二位右大將右大將權大納言權大納言。

◎秋夜守庚申二「秋加余閨」一「霜台秋冷留薄命」などから、匡衡が彈正少

安朝漢文學論考』

◎月露＝月光と露。「開軒滅華燭 月露皓已盈」〔文選〕卷二五〔答靈運〕

謝宣遠

◎爪牙＝補佐すること。「祈父、予王之爪牙」〔詩経〕小雅「祈父」〔童

虎爪牙之群或前或後  
鸞鶴羽翼之類  
自西自東」  
『本朝文粹』卷五為

小一條左大臣辞右大臣第三表」菅原文時〕「金吾者王之爪牙也、孜孜

宿衛」《本朝文粹》卷五「為四条大納言請罷中納言左衛門督狀」大江

匡衡

◎羽翼＝補佐すること。「羽翼已成、難動矣」〔史記〕留侯世家「昔侍鳳

闕已為羽翼之臣」〔『本朝文粹』卷七〕「為出雲權守藤原朝臣請歸京狀」

高二品

◎退佞進賢 媚びへつらう者を退け、賢者を推挙する。「重士輕財已有知」

人之鑒進賢退佞會無偏黨之心」《江吏部集》卷下「七言初夏員外藤

課陪侍而遊志

不期以自会

左顧右顧莫非賢能

如響之応声

文云武云皆俟採用

観夫

月清露白氣爽漏深

催秋情之索々

望天色之蒼々

賓鴻數行影映于五湖之浪

仙鶴一警声遮于半天之雲

至夫

居辺涯兮恋故郷

属幽独兮思往事

関山隔以路仍迴

暗驚王明君之夢

蕙蘭疎以珮未乾

自添楚屈原之淚者也

方今

朝士大夫陪此座者

僉相語曰

陪侍を課して志を遊ばしむ

期せずして以て自<sup>もろ</sup>から会す

左に顧み右に顧みれば賢能に非ざるは莫し

響きの声に応ずるが如し

文と云ひ武と云ひ皆採用を俟<sup>た</sup>つ

観ればそれ

月清く露白く氣爽やかに漏深し

秋情の索々たるを催し

天色の蒼々たるを望む

賓鴻數行 影五湖の浪に映り

仙鶴一警 声半天の雲を遮る

それ

辺涯に居りて故郷を恋ひ

幽独に属<sup>ゆ</sup>して往事を思ふに至りては

関山隔てて以て路<sup>みち</sup>仍し迴る

暗に王明君の夢を驚かせ

蕙蘭疎<sup>うす</sup>くして以て珮未だ乾かず

自から楚の屈原の涙に添ふる者なり

まさに今

朝士大夫の此の座に陪す者

僉<sup>みな</sup>相ひ語りて曰く

公孫弘の開東閣

嫌不為累葉輔佐之臣

謝安石之謙西池

譏只從容華妖態之妓

今之掩古誰敢間然

匡衡

雖霜台秋冷留薄命以愁仕朝

而風樹曉驚歎微禄之未報母

恍忽如忘

曲垂恩私云爾

公孫弘の東閣を開くも

累葉輔佐の臣為らざりしを嫌ふ

謝安石の西池に謙するも

只容華妖態の妓を從へしのみなるを譏る

今の古を掩ふこと 誰か敢へて間然せんや

匡衡

霜台秋冷じと雖も薄命を留め以て愁<sup>なま</sup>じひに

朝に仕へ

而うして風樹曉に驚き微禄の未だ母に報ひ

ざるを歎く

恍忽として忘るるが如し

曲げて恩私を垂れたまへと云ふこと爾り

秋天蕭瑟として一に心を傷ましむ

月冷やかに露濃く鐘漏深し

沙塞に笳愁ひ遙かに曲を照らし

蘆洲に舟礙<sup>ふせま</sup>り半ば襟を濡ほす

練<sup>ね</sup>は砧の上に鋪かれ風空しく擣ち

珠は藁の端に乱れ鶴独り尋ぬ

相對し自ら慙つ身の未だ去らざるを

桂巖雲底に簪を抽かんとす

# 江吏部集試注 (二)

木戸 裕子

(承前)、(二)は『文献探究』第三十六号に掲載している。

## 凡例

- 一、底本は群書類従本を用い、後述の諸本により適宜異同を挙げた。
- 一、校異では、逐一の異同を挙げるのではなく、本文解釈に関わるものだけを記した。したがって、異体字については挙げていない。
- 一、校異に用いた諸本と略号は次の通りである。

内閣文庫(旧浅草文庫)本―(内)	山口県立図書館本―(山)
陽明文庫本―(陽)	祐徳稲荷本―(祐)
静嘉堂文庫本―(静)	神宮文庫本―(神)
国会図書館本―(国)	無窮会図書館本―(無)
東大図書館(E45 656)本―(東A)	
東大図書館(旧南葵文庫)本―(東B)	岡山大図書館本―(岡)
島原松平文庫本―(島)	東北大図書館本―(東北)
京大図書館本―(京)	多和文庫本―(多)

賀茂別雷文庫本―(賀)

名古屋市立鶴舞中央図書館本―(鶴)

本朝文粹(新日本古典文学大系)―(粹)

本朝麗藻(校本本朝麗藻)―(麗)

- 一、本文の漢字はできるだけ現行の字体に統一した。ただし、次の漢字は底本の字体を尊重した。

煙・烟 花・華 叢・藁 窓・牕など。

- 一、割注など小書の部分は「」に入れて示した。

- 一、訓読文は必ずしも平安時代の訓みによるものではないが、古辞書類を参考にした。

※本稿では卷上七番から九番までの詩序及び詩を取り扱う。

七 七言。秋夜陪右親衛員外丞相亭子守庚申同賦秋情月露深詩一首〔并序〕

右親衛藤重相幕下

右親衛藤重相幕下は

礼儀為爪牙徳行為羽翼

礼儀を爪牙と為し、徳行を羽翼と為す

退佞進賢致君於堯舜

佞を退け賢を進め、君を堯舜に致す

輕財重士比跡於伊周

財を輕うし士を重び、跡を伊周に比ふ

花朝雪夜命露酌以動風吟

花朝雪夜 露酌を命じて以て風吟を動かす

素論玄談味聖道以通時政

素論玄談 聖道を味はひて以て時政に通ず

于時

時に

秋加余閨夜当庚申

秋余閨を加へ夜庚申に当たる

惜節物而遣懷

節物を惜しみて懷を遣り